

1. 新型コロナウイルスによって露見したこと

新型コロナウイルスによる影響が社会を渦巻いている。緊急事態宣言を受け、不要不急の外出自粛や施設の使用制限要請となり、人の暮らしである労働と消費の循環は分断された。4～6月のGDP(国内総生産)は前年度比マイナス33%と予想されている。多くの人の家計がひっ迫し、失業、倒産、賃料滞納などの不安の増大は止まらない。国からの支援は対応が遅く、「雇用調整助成金」をはじめ多くの制度はあるものの使いにくい仕組みのままである。一人一人の感染の危険も、生活の不安も、人生も先が見えず暗闇に囚われている。不安を払拭すべき社会保障分野でも、介護も、医療も危険に晒されており、当たり前の社会基盤が崩壊の危機に瀕している。

介護の現場も同じだ。介護はもともと「3密」で感染リスクが非常に高い。それでも厚労省の指針にしたがって感染予防対策をする中で、事業を継続しなければならないのが現状だ。いつ感染するのか分からない不安やもうすでに感染しているのではないかとの疑念を持ちながら、それでも利用者に寄り添う職員の心配とストレスは限界に近い。また人手についても、もともと不足している上に、保育園や学校の休校で出勤できない職員や介護施設が休業になり介護を担わなければならなくなった職員、感染の不安で出勤を取りやめる職員などが続出して、人手不足で介護崩壊の一步手前である。

それでも、介護は現在、人々の社会生活を支えている社会インフラとして無くてはならない職業だとコロナ問題を契機に社会は気づいたと思う。そのために介護という仕事が、社会で継続しなければならない産業であることに論を俟たないようになってきている。だが、社会における介護の必要性は認識されたが、その重要性や価値といったものは未だ不十分で実態を伴っていないという課題もある。それは介護業界の全体で認識する必要がある課題である。介護サービスが、単に人々の生存を支えているばかりでなく、一人一人の個別の人生と生活、いのちと尊厳をも支えているということが伝わっていないのではないか。

新型コロナウイルスであらわになった社会不安は、実はその多くが社会構造にあると言われている。経済至上主義によって、医療や看護、介護や教育といった人の根幹を支える仕事は顧みられずにきた。だから、社会不安を払しょくしていくためには、そうした人と人を支える仕事に、より一層の配分を行う必要があることは誰の目にも明らかである。だが、国家はコロナ収束後に今の社会構造を変える気がないようだ。その一端が『GO TO キャンペーン(仮称)』という経済産業省の補正予算に現われている。2万円分のホテル宿泊費のクーポンや、レストランやイベントチケットなどの20%オフなど観光やイベント、飲食業などへの支援を目的とした経済対策費で、その予算は約1兆6000億円を越える。これに対して、医療に関する予算は約6600億円である。その上に残念なことは介護が含まれてないことである。介護の軽視の現実。だが、そうした中になお、かすかではあるが新型コロナで崩壊寸前の介護現場に、「ポストコロナ」の萌芽^{ほうが}しつつある望みがある。それは、介護という人と人が困難を共に乗り越えていこうとする人間の営みに目を向けるときに顕在化しているのを見つけることができる。

2. 現場で見えてきたこれからの介護

日々コロナ予防で疲弊している現場を見ながら、私にできることはないかと考え、数年ぶりに食事介助をしている。重度の要介護者や認知症の方など、一人一人の食事のペース、食事量、食事形態、口への入れ方、咀嚼力、次を食べる合図など一人一人違う個別の食事介助に気を配りながら、その人の生活を想像し人生を想って介護している。介護をしながらも、利用者の少しでも主体的に生きようとする力や、人間

としての自立心や尊厳を見出し、感動を覚える。

私もそうだが、皆さんも新型コロナウイルス対策の最中の介護をして気づくことが多くあると思う。例えば外出自粛で行動を制限されたことで、「自由」がどんなに大切かを実感している。私たちは介護現場で、認知症ケアの「スピーチロック」をされる不自由さや施設だけに閉じ込められる利用者と同じような体感をして、改めて「自由」の制限をすることの権利や侵害性に気づく。また、先行きが見えない不安を体験することで、自分の置かれている状況をコントロールできず、予測や把握ができないことどういふことであるかを感じる。これは、認知症でいえば見当識障害の混乱さと重ねられるし、要介護者が老いと病を抱えて先行きの不安を抱えていることとも重なる。あるいは、「死の恐怖」がある。いのちよりも大切なものはない、ということを否応なしに突き付けられている。お金も大切だが、いのちがあつてのことだと身に染みて分かる。このように私たちはコロナ以前と以後では、実は無意識のうちにたくさんの気づきを得ているのだ。こうして改めて社会で希薄になっている人は誰もが能力によらず掛け替えのない存在であり、失い見捨ててはならないのであるという福祉と人間の根幹を深く自覚する。私たちはそうした気づきを得ながら今日も全国で介護を続けている。その小さなケアの積み重ねが、社会の有り様を『進化』(evolution)させ、変えていく「ソーシャルアクション」のチャンスになると改めて感じる。

この『介護の本質』という素晴らしい営みは、現代社会に必要な不可欠である。社会が忘れてはならない真理をコロナの痛みを通して私たちは教えている。介護は私たちの社会と離れたものではなく、介護の中に社会の縮図があり、社会の問題や歪みが介護に露見してくるのだ。

3.ポストコロナ

来年度(2021年度)は介護報酬改定を控え、次の2024年の介護報酬改定で大きく変更すると言われている。このままでは財政難を理由にますます介護の環境は悪化するのには確実だ。そのような激動のカオスのなかで、何を羅針盤として進めばいいのか。それは人と人が相互に助け合う『連帯』が、何よりも大切だと思う。特に今回のコロナの災難で介護や福祉はもちろんだが、人類が改めて強く自覚したことだ。

私たちはコロナで仕事や家族の困っていることなどを隠さず分かち合うことが増えた。職場でも自分の弱さや困りごとやストレスを分かち合うようになった。そして、分かつことで助け合いが生まれ、思いやりが生まれている。そのことは特に、人と人との連帯を分断する「ソーシャルディスタンス」が、かえって、ケアや人の温もりを感じられる距離の必要性を目の当たりにさせている。改めて、不安や恐れ、先行きの不安なとき、誰かの存在とつながりの「場」が必要であると教えている。共感や理解という概念で語ることは簡単だが、ただのことばよりも実感として広がっている。これまでの社会は、自己責任が強調され、差別、排除、区別、競争などで社会が形作られていた。でも今は、他者への思いやりや心配り、そして愛という『ケア』などが社会に広がっている。今後、同じように、私たちが生きていく間に、また何か起きうる想定外な困難(ウイルスだけではなく老いや病)や危機があつたとしても、今回の学習で助け合い、支え合うことをきつと今まで以上に出来ると思う。そして、困っている人がいれば今まで以上に気がつき、手を差し伸べ、思いやりをもった言動になっていると思う。人類がこのことを学び、英知として蓄積したらどんな素晴らしい財産になるだろうか。この原動力が介護にあり、今まさにその力が発揮されることを時代は待っている。

まさにこの萌芽しつつある社会は、少し前まで耳にタコができるほど聞いた、あの「地域共生社会」の原型であり、その先がこの『連帯社会』である。私たちはまさにコロナの最中であつて「地域共生社会(地域包括ケアシステム)」をブラッシュアップし継続しているのだ。この必要性が今、小さな福祉の世界だけではなく、社会や国を超え、地球規模から希求されているに過ぎない。介護に関わる私たちから変えて

いかなければならない。

だから今は、私たち介護や福祉に携わる全ての人が、新型コロナウイルスの感染予防を最大限実施しつつ、苦境にある社会の姿に萌芽を逡巡しながら、新型コロナウイルスが収束後に、あるべき『介護福祉』と『社会の有り方』を描き、コロナウイルスではなく目の前の利用者に向き合おう。でないと、社会も、介護も生き延びられない。私たちは今、ポストコロナ、そしてポストモダンの歴史の分水嶺に立っているのだ。

『人と人とのあいだで営まれるさまざまな関係こそ、人間に真の幸福をもたらす主要な、おそらくは唯一の源泉と考えられるからである。その逆もいえる。すなわち貧しい人間関係こそ、人に不幸をもたらすもっとも重要な唯一の源泉である。』（「ケースワークの原則」バイステック著）